大東文化大学経済論集　109－3、2018.03

# ランデス著、竹中平蔵訳『強国論』再論３
## ――ランデスの日本論A

近　藤　正　臣

筆者は、David S. Landes, 1998, *The Wealth and Poverty of Nations: Why Some Are So Rich and Some So Poor* を紹介し、内容について再び考えてみようとして、「ランデス、竹中平蔵訳『強国論』再論１」（『現代経済社会の諸問題――渡部茂先生古稀記念論集』）および「ランデスの産業革命論再論２」（『経済論集』第108号』）を発表させていただいてきている。これでやっと、ランデスが＜世界の豊かな国と貧困な国＞という問題意識の中で日本のことをどう観ていたかにたどり着いた。ランデスは Ch. 22, ‘Japan: And the Last Shall Be First’ (pp. 350ff) および Ch. 23, ‘The Meiji Restoration (pp. 371ff) で、日本の戦国時代と明治維新を扱っている。竹中訳では、「13章　日本――そして＜最後にやって来た者＞が先頭を走る」（285ページ以下）と、「14章　もっと評価されてよい＜明治維新＞」（308ページ以下）とされているところに当たる。ただし、本稿では Ch. 22 のみを扱う。これまでのように、竹中訳についても気になる点にふれることとする。

まずは、これまでのように、原著の内容を見てみよう。Ch. 22 ‘Japan: And the Last Shall Be First’ (pp. 350ff) では、ヨーロッパでは日本が＜黄金の国＞だとされていたので、いったん中国まで来ると、どうしても伝説の国ジパングを目指すことになったが、実際には、1543年に（ポルトガル人が種子島に）台風に流されて漂着した――と始まる。しかし、

① 厚いテーブルまでに金が使われ、「節約の精神」がどこにもふんだんにあると期待してきたが、両者ともまったくそうではないことを発見する。そして、

② 天皇が支配していたとされていた当時の日本は、そうではなくて、現実には、藩同志が争う戦国時代であった。これをランデスは「16世紀後半の日本はまさに血の海と化していた」（邦訳、286ページ）として、桶狭間の戦いも川中島の戦いも、あるいは一向一揆をも応仁の乱も、この一言で片づけられている。しかしこれは、

力と暴力を尊敬していたヨーロッパ人にいい印象を与えたとする。ポルトガルのあるイエズス会宣教師はこのことについて「日本は東洋一の国で、その規模・都市の数・好戦的でありながら文化を有する人民という面で、まさにヨーロッパ諸国と肩を並べる」とさえ言っていた。これは、日本を知る人たちの多くが同意見であった、と。そして、戦国時代が終わってもこのような印象は変わらなかったと言う。

③ さらに、ヨーロッパ人は異国人に慣れていたが、日本人はそうでなかったとして、竹越与三郎、1930刊の「日本文明史の経済的側面」3巻（*Economic Aspects of the History of the Civilization of Japan,* 1930）からランデスは引用する。（『カラーペディア　英文日本大辞典』（講談社）によれば、竹越与三郎 <1865-1950> は現在の埼玉県に生まれ、慶応義塾（慶応義塾大学の前身）に学び、『時事新報』などに執筆し、西園寺公望の目にとまり、『世界之日本』の編集長を務める。西園寺の推薦で、文部省に勤めるが、やがて、1902年＝明治35年には立憲政友会所属の帝国議会議員となり、4度ほど選ばれる。さらに1923年＝大正12年には貴族院議員に、1940年＝昭和15年には枢密院のメンバーに指名される。上に引かれている著書の他にも、『新日本史』、『日本経済史』などの著作がある）。

①日本人は初め、赤毛のあごひげを生やし、青い目のポルトガル人に驚き、

②つづいて、鉄砲と火薬の威力に「胆を潰した」、と。

③世界がいかに大きいかを思い知った。また、いろんな物の考え方や学問に驚異の目をみはった。これら全体を見た日本人は、海の向こうには新しい天国・土地があると信じ、この文明をぜひとも知りたいと思った。

④なぜならば、文明とは、静かに儒教を学ぶことではなくて、目の前にある現実的な成果だと思うようになった。

⑤この異人たちは、当時の日本ではa drug（店ざらしもの）だったものの価格を引き上げ、さらに供給するよう求めた。草や木の1片にも価格がついた。どうして外国貿易がポルトガル人に益をもたらすのか分からなかった。金持ちで強力なポルトガル人ととにかく親しくして、その文明から学ぶべきだというのが一般的な考えであった。

したがってヨーロッパ人は、中国人によるよりはるかに日本で暖かく迎えられた。中国人は彼らをまるで伝染病患者のように隔離しようとしたが、日本人は、彼らが飛ぶ鳥を打ち落とせるような力をもっていることが分かると、もろ手を挙げて歓迎し、その秘密を学ぼうと相競った…。彼らと物の売り買いをしようともした。相当の儲けがあったからだ。ヨーロッパ人側では、このように歓迎してくれる社会に根を下ろそうとし、富を入手する機会とみて、なんとかして日本人の役に立とうとした。しかも、exotic な日本人は自分たちが買えるものをもっていたが、ヨーロッパの物品をとんでもない高値で買ってくれ、自分たちの売るものには、ばかなくらい安い値段をつけた。このようなふたつの世界は抱き合い、双方で自分たちは運がよかったと思い、相手のことを気前がよいと考えていた。

さらにランデスは以下のように日本人のことを論じる――日本人の向上心は無限だったから、彼らが学ぶほうになった。日本では、日本の支配者は太陽の神（天照大神）が祖先で、その中心地にいた自分たちのことを、選ばれた者だと思っていて、アジア全体を支配すべきだと考えていた。ランデスは脚注で次のように説明する。太閤秀吉は太政大臣として実質的に日本を支配していて（1586 ～ 1598）、朝鮮と中国だけでなく、インドまで日本が支配して当然だと思っていた。ただ、日本人はこれらの国の大きさ・人口については、正確な情報をまったくもっていなかったともする。しかし、‘Who Knows?’（驚くべきことに）、数世紀後にもまた、日本人の中にはこれらの国々全体を＜正統なる征服地だ＞と見る者が現れることになるのである。16 世紀のフィリピンについて、竹腰与三郎は『日本文明史の経済的側面』において失望を表明している。――「もともと日本人はこの国をスペイン人より早くから占領しており、よって、先に住民となった者の権利として主権をもっていてしかるべきであった。それをスペインがとってしまったのである」としているのである。この後ランデスは、「ヨーロッパ人が日本人を気に入ったのは不思議でもなんでもなかった、考え方がとってもよく似ていたのだから」と、からかい気味にのべている（p. 353）。しかし、ヨーロッパ中世と戦国日本がよく似ていたことはこれから、たびたび指摘される。

筆者は、愛知県出身で、秀吉が朝鮮を攻撃し、明にも出兵したことなどは知っていたが、寡聞にして、「日本がインドまで支配して当然だと思っていた」ことは知らなかった。また、竹腰与三郎にいたってはフィリピンまで日本が＜主権をもって＞当然だとしていたこ

とも知らなかった。＜日本がアジア全体を支配して当然だ＞と思っていたところまで行くと、20 世紀のアジア太平洋戦争のことまで考えさせられる。真珠湾攻撃に先立って、マレイ半島を攻撃していたのだが、日本がこの戦争を始めたのはアジアを西洋の植民地支配から開放するためであったなどとは、とても言えなくなる。

日中間の関係についてランデスはさらに続ける。日本人は長い間、文化的に下位にいた。与えるより取る方、教師より生徒であった。表意文字としての漢字も中国から入ってきたし、書道の道具も中国から入って来た。ランデスは脚注において、日本語についても説明し、日本で使われている漢字の多くには、ふたつの読み方がある、訓読み（日本独自の読み方）と、音読みであると説明し、訓読みの例として＜腹切り＞を出し、音読みの例としては＜切腹＞を出している。そして、「これら漢字とその意味を採用したことで、日本語の語彙（とくに抽象的な概念を表わすもの）を著しく豊かにした」（p. 353）としている。

言語自体のほか、絹、陶磁器、印刷、家具、絵、絵のスタイル、さらに、仏教信仰、儒教の知識など、すべて中国から来たものである。しかし、いろんなものを学んだからといって日本人は自分たちが小さくなったとは感じなかった。逆に、そもそも自分たちは生来、中国人より優れていたと思ったとしている（p. 353）。このことをランデスは、ラッフルズ（Raffles= 当時はジャワの植民地行政官であったが、もちろんこの後、シンガポールを建設し、今ではその名をつけたホテルがある）の 1812 年の報告から Wilkinson が *Japan versus West* に引いた情報からとっているとしている。筆者は、中学生時代の日本史の受業で、聖徳太子が時の中国の皇帝に、「陽の出ずる国の太子、陽の没する国の太子に…」という文句で始まる書簡を出していたことを思い起こす。日本は、日本が小国であるからと言って、決して卑屈にはなっていなかった。

こうして、日本人が初めてヨーロッパ人に会ったときには、ヨーロッパの文物を学ぼうとした。武器のコピーを作り、時計を真似し、多くがキリスト教に改宗した。それでも、日本人の優越感は変わらなかった――とランデスは論じる。

だから日本人がヨーロッパ人に出くわしたときには、自分たちの学び方で学んでいった。武器をまね、時間を測る機械の模倣品を作り、多くがキリスト教に改宗していった。そしてそれでも、まだ自分たちの方が優れていると信じていた。(p. 353)

イギリスの『地理百科事典（*An Encyclopedia of Geography*）』（London、1834 年刊行）の Hugh Murray の記事に以下のような記述があったのをランデスは引く――「日本人の国民性はアジアの他の国（特に隣国中国）とは著しく異なっている。中国人はおとなしく、静かで、奴隷根性をもっていて従順なので、専制主義を喜んで受け入れていた。それに対して日本人は、エネルギーにあふれ、独立心・高い自尊心をもっている」と。筆者には、日本人が奴隷根性をもっていると、大学時代に竹内好の評論で読んだことが忘れられないのだが…。

こうしてランデスは、日本がキリスト教とどう対したかの問題に入る。まず、キリスト教は「国中で大流行する運命にあったようである」（p. 353）と切り込む。以下、竹中訳の誤訳・不適訳の指摘を兼ねて論じよう。

まず、「キリスト教が国内で大流行する運命にあった」というところから問題にせざるをえない。竹中訳の 288 ページの 4 行目に、「キリスト教の流行は、すっかり廃れる運命にあったようである」とあるが、その段落では、いかにキリスト教が日本に広まったかの説明がある。原著をみてみると、The vogue for Christianity seemed destined to <u>sweep all</u>. (p. 353) とある。これは、逆に、「キリスト教の流行は、国中で大流行する運命にあったようである」の意味ではないのであろうか。以下に続くのは、「この宗教が地方の支配者に人気が高く、かつかつの生活を送っている貧しい人々のあいだではさらに人気が高かった…」と続いている。そして、「大名（藩の支配者）と侍（特権階級であった武士階級の構成員）のなかにはキリスト教徒になった者もいた」とだけあるが、原文では、Some *daimyo* (rulers of *han*) and *samurai* (members of the warrior aristocracy) became Christian <u>out of conviction</u>. Christianity offered a comfort and spirituality missing in traditional rites and gestures. Others converted <u>for practical reasons</u>: Christianity provided a channel to European trade and technological assistance in a tough political arena. (pp. 353-4) とある。なんのことはない、ここでは、支配階級とその他の者（士農工商の「農工商」階級）の間で、どちらにも改宗した者がいたのだが、その理由を対照的に表しているのではないか。支配階級の者は conviction（確信、信念）から改宗し、その他の者はより現実的な理由から改宗した、ということではないのであろうか。素直にこのよ

うに読めるし、このように読んで初めて、それに続く「だが、こうした状況（= 国中で大流行するという状況）は長くは続かなったのである」（288 ページ）の続き具合が分かる。

ただし、ここで使われている英語での the Americas (p. 354) というのは、ふつう、「南北アメリカ大陸」のことを指す。「アメリカ大陸」（288 ページ）とするだけではあいまいであろう。スペインの支配地を指していて、フィリピン（とインドネシア列島）と並べているのだから、アメリカにおいては、中南米におけるスペイン領を指しているのであろう。

しかし、astonished (p. 351) が「胆を潰した」とされ、a drug (p. 351) を「麻薬」などとせず、「ありふれていて売り物になるとは考えてもみなかった品物」（286 ページ）とされているのは適切であると考えられる。そして、unlimited aspirations (p. 353) を「飽くことなき向上心」（287 ページ）としているのも、たとえば「無限の抱負」などとするより、日本語の含意に寄り添った訳とみることができよう。

ランデスの論を直接に見るところに戻ろう。彼は続いて、these were classical conversion strategies (p.353) とする。これはまさに、「支配者は、それまでの伝統的な儀式などにはなかった魂の平安を見て、自分の信念から改宗し、他の者は、現実的な理由から改宗した」のはキリスト教を広める古典的な戦略が功を奏したということではあるまいか、と言うのである。この後に、「キリスト教は厳しい政界において、ヨーロッパとの貿易のチャンネルを提供し、技術的な援助をも提供した。しばらくは、topmost leader の織田信長や豊臣秀吉でさえもが、この道に沿っていた」と続き、その後の段落で、「ただ、これは永続はしなかった」となっている（p. 354）。オランダの新教の者が、「このようないいことづくめのローマの伝道師たちの行動は、イベリア半島の政治的・商業的野心の準備作業だとしていったのだ」と続く。これは、次に述べられてスペインの水夫の不用意なことばが示している。「スペイン国王陛下はまず神父を送り込んで人民をキリスト教化し、その後、スペイン軍が征服する際にこれを利用するのだ」（289 ページ）と明解に述べられている。

ランデスは、ここで徳川封建制度の内容を述べるが、ここに筆者の気になる点があるので、それを指摘したい。ここでランデスは、次のように述べるところがある。‘A few devoted themselves to domanial (*han*) administration and cultivated an ethic of function that would one day turn personal loyalty into national duty.’ (p. 356)。‘…would one day…’ というのであるから、これは、やがて時代が進んで明治になり、日清戦争・日露戦争と進んでいったときに、それまでは藩に対する忠誠心が国家に対する忠誠心になることをラン

デスが予見したのを述べているのではあるまいか。竹中訳では「なかには、藩の行政に従事して、個人の忠誠を国家の務めに変える行動規範をつくりあげた者もいる 」（292 ページ）としていて、これがその後の日本人の行動様式を規定していったことを言っているようには読めない。

しかし、ランデスにしても、このような徳川時代の日本人行動様式がやがて企業に対する忠誠心にもなっていったことを見落としているように思われる。「国家の務めに変える」というところは、「企業、および国家に対する務め (…would one day turn personal loyalty into national duty as well as into corporate duties to commercial companies to produce very loyal corporate workers) と言ってしかるべきところではなかったであろうか？　もちろんこれが、やがて、この企業のために必死で働く労働者をつくり、欧米を追い抜くほどに豊かな日本を創ることになる。同時に、過労死さえもたらすことにもなった。

筆者が思い出すのは、大阪大学の浜口恵俊教授が、1960 年代に「間人主義」が日本人の identity を決める（つまり、西洋では個人の identity を決めるのはその個人であったが、日本では、その者がどのような人との間に関係をもつか、誰と付き合うか…で決まる）としたことである。もちろんその頃の日本人は 9 時から 5 時まで働いて帰宅するわけではなかった。残業をし、そうでなくとも、仕事の後、同じ職場の者と飲んだりしていた。たとえば池袋を出る下り最終列車（23 時 45 分ころに池袋を出る）は満員であった。

この後ランデスは、鉄砲の他にふたつのものを西洋から取り入れたと論じる。竹中訳では省かれているので、できるだけ詳細な拙訳を示そう。

（このふたつのものとは）めがねと時計である（p. 359）。めがねについてはとにかく日本でもこれを作ったということ以外、あまり多くのことは知られていない。しかし、時計については、一部は今でも残っているので、いろんなことが分かる。ここでも日本人は外国のものを自分で作ってしまった。中国とちがって、日本では時計を大規模に作った。つまり、王子様だけのものではなくて、多くの人に売り、日本的な形にしてしまった。日本式の時計は世界のどこにも見当たらず、他にヨーロッパの革新を土着化することにこれほど成功した国もない。しかも、中国人と違って、日本人はこれを使って個人的な時間厳守に活用したのである。しばらくすると、日本はヨーロッパの時計を買

わなくなった。中国では、2個を一組として、身に着けた。うちの一つは正しい時を示してくれるだろうと考えたのである（しかし、どちらが正しい時を示したのか？）。日本ではしかも、この時計を小型化して、watch＝腕時計となるようにした。腕時計も十分に正確であった。

ここで「十分に」と言うのは、やはり日本の時計はほんとうに正確だったとは言えないかったからである。なぜならば、日本の時間の測り方は機械仕掛けの時計とは違っていた。そして、日本人はそれまでの時間の測り方を変えようとはしなかった。日本では、時間を同じようには測らなかった。日中と夜間とでも、あるいは季節によってでも、同じ1時間でもそれが違っていたのである。だから、日中の時間と夜間の時間が一致したのは、春分と秋分の時だけであった。もちろん夏には日中の1時間は夜間の1時間より長かった。

これに対して、機械時計は同じリズムで時を刻んだ。いつでも1時間は1時間なのであった（少なくとも、それが機械時計を作った時の意図であった）。日本人はこのジレンマを解くために、昼夜のリズムが異なる時計を作ろうとした（あるいは、機械としては同じように動いても、それが異なった時間を示すよう、考えた）。ただこれは、やはり間に合わせにしかすぎなかった。出発点からして、設定がすべて間違っていたのである。理屈でいけば、時は毎日、時間を合わせなくてはならなかった。これは苦痛である。だから、2週間ごとに時間を合わせることにする。これが「思い出したときに」となる。なに、これはたいしたことではない、と時計の示した時間はもともとおおよそのものであった。

たしかに、おおよそのものでも、社会的には十分であった。今日でも、秒の単位まで正確なクオーツの時計をもっていても、一定の遅れは許される。他の人が遅れるのを許す好意であろうと、自分に寛容になるかは問わず…。時計の正確さを活用しない間は、時計の本来の科学的・技術的な潜在能力を利用できなかった。日本人が19世紀後半に近代化しようと決したとき、早々にそれまでの時間の測り方を捨て、1時間は1時間で同じだとした（ヨーロッパ人はこれを最初からしていて、教会の知らせた時間の代わりに、常用時＝civil time を用いていた）。（p. 359）

常用時とは、「日常一般に使われている時間」のことだと辞書にはある。しかし、現在の日本でこの常用時が多少ともずさんなものであるとはどうしても考えられない。日本の列車の運行は punctual だと言われているが、これは決してただの宣伝文句ではない。たとえば、筆者が池袋に出るのに乗る列車の通過するある駅は、この線のほかに最低３本の別の線が通っており、そこでは２分の遅れが生じてもすべての他の線の列車運行に差支えがでるので、かなりの長距離を走るほとんどすべての電車が、１分の遅れも出さずに走っている。この田舎でも、市役所のスピーカーによる案内で、「ただいま午後４時 30 分になりました」と言う時には、実際に４時 30 分からほとんど離れていない。ランデス氏が乗った日本で電車はその運転がもっと不正確だったのか？　もっとも、かつては悪名高かったニューヨーク市の地下鉄も、いまではきわめて punctual になっている。

さて、再びランデスの論じるところに戻ろう（pp. 360ｆｆ）。ここでランデスは、東洋で同じように西洋に立ち向かった中国と日本を比較する。曰く、日本が鎖国をして、伝統に戻り、泡沫のような生活をしたのは、中国が西洋を拒絶したことと違いはないように見える。しいて言うならば、その方針には原理原則があったという意味で、中国の場合より断固としたものに見える。しかし、その結果の違いはいかに大きかったことか！　細部にわたっては西洋の文物に変更を加えたり、政治的挑戦に次から次へと直面したのは中国であったが、本質的に変わらなかったのはやはり中国であった。そして日本人は古いやり方に固執はしたものの、いったん変わろうとしたら、西洋の挑戦がなくても、あれほど大きな変革を遂げ、明治維新の直前に産業化 (industrialization) を遂げたのであるから。

この一種のパラドックスには二つの側面があり、これを明確に区別すべきだと論じる。

①　日本国内で変革を進めた諸力と、

②　外部の世界との接触

である。まず①の点については、徳川時代の日本が＜中世ヨーロッパを小型化したようなもの＞であったことがある。たとえば、幕府という単一の支配機構があった。これは、西洋の帝国、あるいはローマ教会のようなものであったが、それより強力であった。そしてそれに付随して各藩があった。この藩はどちらかと言えば、別々の独立した国のようなものであった。たしかに「主権」はなかった。しかし、いろんな自治権は持っていたし、

その経済・社会の規制のために、独自の掟を作ることができた。そして、社会は階層的に支配されていた。ここからランデスは士農工商という徳川時代の身分制度を論じ、この4階層の下の不可触賤民にも触れる。最も上には藩の戦士家臣がいて、土地は持たないが貴族といってよかった。この家臣たちの＜給料＞はお米の量で決められていて、その下には、新しい、上昇する商人の階級があった。この間にいたのが農民で、彼らは食料を提供することからそれなりの敬意を払われていた。そして、その下には、＜工＝職人＞たちがいて、その作る物の質が重要であった。最下層には、相続される不可触賤民がいた。＜ *eta* ＞とか部落民と呼ばれた。動物の死骸や死人を扱うので、けがれているとされた。皮肉なことであるが、侍たちも殺傷を行ったのであるが、これは、それゆえにかえって名誉を与えられた。

ランデスはさらに、日本と中世ヨーロッパを比較する。ヨーロッパでは封建領主は自分の土地をもち、その収入のほとんどは物納ないし労働で受け取った（労働は作物に変わり、それが収入になった）。しかし、時間がたつと、新しい都市・町が生まれ、新しい物や人が現れ、領主の奥方たちは新しい必要物を欲求し始めた。これを満たすために、地主たちはそれまでの伝統的な所得を貨幣に替え、これが自由に使えるものになっていった。こうして西ヨーロッパの長期的傾向として、荘園の使用料を貨幣で支払うようになっていった（これが鍵となって、これら小作農たちは自由を得ていった）。

日本でも同じであった。財政は米を元にして計算された。つまり、この主食を元にして、*kokudaka-sei*（石高制）というもので支配者は生活を確保した。大名（領主）は収穫量のおよそ3割をとり、そのほとんどを自分とその家族のために確保し、残りが自分の家来である侍の収入となった。ヨーロッパの家臣と違って、これら侍は土地を保有しなかった。

食料の量は、自分の身分の高さで決まった。これ以上のものは不要だというのが原則であった。しかし、食べるだけの人生というのはないので、地位が上がるについて食料品以外のものに対する欲望は増える。ここで、大名とその家臣はお米の多くを貨幣に替えるようになっていった。貨幣で、人生のよりすばらしいものを楽しむようになっていったのである。このために、それまでバカにしていた商人に頼るようになり、商人がじょじょに大きいな役割を果たすようになっていった。彼らは自分の欲望でバブルのようになっていった。ここでは人間性が政治制度と結婚したようなものであった。というのも、参勤交代制

と江戸の雰囲気は放蕩・浪費を鼓舞したからである。

こうして侍たちは農民からもっと多くのものを得ようとするようになった。ある財政の管理者が言ったように、「農民はまるでゴマの油のようなもので、絞れば絞るほど、この油はたくさんとれる」のであった。これはしゃれた言い方かもしれないが、絞りすぎると農民の反乱（一揆）を招いたり、逃散を招いてしまう（ヨーロッパのように、抑圧に対する最善の保護は、逃げ道のあったことである）。歴史家は、1590 年と 1867 年の間に 3,000 件もの農民の一揆を数えた。この時期の後半、そして豊かな地方の方が頻度は高かった。一揆の目標は、豊かな農民や商人、それに金貸しの家や倉であった。経済的変化が社会的秩序を揺るがしているのは明らかであったし、社会の契約をやぶりつつあったのだ。

お金はねじ上げるより借りる方がやさしかった。大名や侍たちは、出入りする商人たちを熟知していたし、すでにお米の売買はしていたし、政治にもかかわっていた。商人の方では、自分たちの顧客の性格などはよく分かっていたので、借金を頼まれると断ることはできないと思うようになっていった（ここから、入ってくる食料をあてにして、借金をすることも行われ、その金利は年 10 ～ 20 パーセントであった）。確かにこのような商人にとってはこれほどリスクの多い相手はいなかった。借り手の方がはるかに強力であったし、返済を拒否する可能性もあった。しかも、これら借金の踏み倒しをする連中は、さらに上の連中からの支援を受けていて、この高位の連中も、貨幣の力を憎む独自の理由があって、徳政令を発して、借金の棒引きをすることもあったのである。

しかし、こうした方法は諸刃の刃でもあった。借金ばかりしている者や、返済を怠る者は常にもっとお金を必要とする（今日、債務国が交渉に持ち込むのも、借金がもっと必要だからである）。一度借金を踏み倒したからと言って、いつもそんなことができるわけではない。債務不履行は噂となって広がり、やがて誰も貸そうとはしなくなる。

ここで「いつもそんなことができるわけではない」としたのは、Just because they can repudiate debt does not mean than they can afford to. The news of default gets around and soon no one wants to lend.（p. 362 の上から 2 ～ 3 行目）のところである。原文で that does not mean than they can afford to. の than は that の誤植とみる。ここが竹中訳では、「借金の支払いを拒むことができるからといって、暮らしが安泰というわけではなかった」（296 ページの下から 2 行目）となっている。…not … afford には、（「…する余裕がない」（通常、否定形で使われる）という意味もあるが、ここでは、すぐ後に、「やがて誰も貸そうとはしなくなる」とあるのだから、「踏み倒すようなことを afford することはできない」の意味ととるべきであろう。

大名や侍たちは商人のいないところでは彼らをバカにするが、1対1で会ったときには（男が女に）言い寄るように口説く。ここでランデスは日本における礼儀について解説をする。――「日本では礼儀と言語は細かいところで自分の上位・下位を表し、浪費家の侍たちはbend their head（頭を下げ）、softに話し、give seasonal gifts（季節の贈り物をし）、刀を一本（だけだが）贈り、取引上の特権を授ける（この方がニコニコ笑いや贈答品より意味があった）。

筆者は、いかに商人にへつらおうとしたからと言って、武士が商人に年末には歳暮を贈り、夏にはお中元をするということがあったのだろうか…と思ってしまう。このようなことに疎い筆者には自信をもって言えることではないが…。

こうして商人は金を貸し、ますます豊かになったとランデスは続ける。しかし、これに失敗した商人も何百人もいた――but … hundreds of them, foundered on the rock of bad faith)(p. 362の11～12行目)。侍たちは、自分の主人のためなら腹を切る覚悟があったが、侍たちの言質には何の意味もなかった――しかも、これは対商人について当てはまるだけではなかった。どちらに転んでも商人たちに勝ち目はなかった。侍には金を貸しても失敗、貸さなくても大失敗なのであった。

ここでランデスは、淀屋辰五郎の話を持ち出す。『カラーペディア　英文日本大辞典』（講談社刊）によれば、彼は元の名を岡本といい、その第1代ツネヤスが、1619年ころ、大阪に移り、淀屋という屋号で木材商になった。さらに、統制下にあった生糸の中国との取引を行ったり、大阪の米市場の蔵屋敷となって、巨額の利潤をあげた。辰五郎はその第5代であった。

彼は伝説になっていると言う。この家族は、とくに大阪の公共事業を行うことによってひと財産つくった。大阪を日本の商業の中心都市をする上で、この家ほどいろんな貢献をした者はいなかった。しかし、第5代目の辰五郎は公共のためにはちょっと豊かになりすぎたと言うのである。あまり多くの大名が辰五郎に借金をしたので、国の利害から考えても、あるいは儒教の教えから考えても、こんな巨大な商人を許してはおけないとして、1705年に幕府が彼の財産を没収し、「そもそもその社会的地位を大幅に上回る生活をしている」との理由で、彼の請求はそのかなりが無効とされた。彼の恩に報いるために…とんでもないことをしたものであると、ランデス。

ここでランデスは、フランスで1653年よりルイ14世の財務卿をしたフーケ (Nicolas Fouquet) の場合との比較を出す。フーケは急速に大きくなり過ぎた、豊かになりすぎたというので、彼がルイ14世国王を自分の新しい城に招き、あまりにも贅沢なもてなしをしたので、国王はとてもなだめられないくらい、嫉妬してしまったのである。国王は、「これは自分をさんざんだましてきたに相違ない」と考えて、裁判にかける――と見せかけて、うんざりするような尋問にかけ、1661年に有罪の判決、しかも無期懲役の判決を下したのである。

これについてランデスは以下のように論じる――長期的に見れば、日本にはいろんな限界や裏切りがあったとしても、やはり日本の商人は栄えた。そして、強力な者たちに頼られ、商人はじょじょにいろんな制約から解放されていった。彼らは自分たちのイデオロギーを作り、その機能と重要性のセンスをもつようになった。さらにまた、2本の刀をもった連中から、自分たちを守る規則や戦術まで展開していった。ここで鍵になるのは、single-mindedness、深く染み込んだ他者への懐疑、金融面での倹約、そして度胸であった。何にもまして、倹約と報奨、そして蓄積であった。「侍は名声を求めるが、街の者は名声なんて捨てて、利潤をあげる。そして、金や銀を貯める。これがいわゆる＜わたくしのやり方＞なのだ」と。

次にランデスが述べるのは、三井孝房（1684-1748）である。その後、300年も続く三井財閥の3代目で、Hane, Mikiso, 1982, *Peasants, Rebels, and Outcasts: The Underside of Modern Japan* (New York: Pantheon) には以下のような叙述があると言う。

「自分の仕事と無関係なことに、配慮・注目して、無駄をしてはいけない。侍の猿真似をしたり、神道・儒教・仏教が自らの心の内面を保持してくれると思う商人は、こうしたものに深入りしすぎれば、やがて、これで自分の家を潰されることになろう。他の芸術・娯楽については、このことはもっと真実である。一瞬たりとも軽視してはならないのは、あくまで家業なのである。」

ランデスは再び、日本とヨーロッパの類似性にもどって、こう続ける。――ヨーロッパとの類似性は驚くべきほどである。日本にカルヴァン（Calvin）はいなかった。しかし、

実業家たちは似たように働くことを重視した。重要なのは、富というより勤労・働くことを重視することであった。禅の僧侶鈴木正三（すずき・しょうさん：1579-1655）は、欲というものを魂の毒薬だと見ていた。そして、仕事は別物であった。「すべての職業は仏教の実践である。仕事を通して、われわれは仏陀を通しての悟りの境地、暮提（救済）を得るのだ」と言った。このように行動するのに、必ずしもウェーバーの言ったプロテスタントになる必要はないのだ――とランデスは言う。

ランデスはなんと、ウェーバーの唱えたプロテスタンティズムの倫理がここ江戸にもあったと言うのである。さらに続けて、カッコをつけて次のように言う。――（日本の学者たちは、この勤労の倫理が universal（場所・時間で見て、どこにでもある）ものではない、としてきた。しかし、江戸時代の後半においては、労働はより厳しくなり、勤労の習慣 (work habits) が広がったことは、これが近代の産業に移ったときには、大いに役に立ったのである。彼らのことばでは、“industrious revolution” prepared the way for the industrial revolution” だったのである、）と。

ほんの少しだけこのことばを説明しよう。英語の industry ということばには、今ではふたつの意味があるとされる。ここでは二つの英和辞典を直接に引用する。ひとつは編集主幹小西友七『フレッシュ・ジーニアス英和辞典【改訂版】（大修館）で、ここには以下のようにある。

『「（人に）本来備わっている性質」「勤勉（性）」→「（それによって生み出される）産業」㊥industrial（形）、industrious（形）―― 名㊥…tries/-z) **1 産業**；（大規模な）工業、製造業；　©（産業部門の）…業；事業◆商売（（形容詞は industrial））: the center of much industry　多くの中心地 /heavy [light] industry（重［軽］工業）/a key industry 基幹産業 /a leisure industry レジャー産業 /a has-been [decaying, declining] industry 斜陽産業。**2** U［集合的］産業界；産業経営者；会社側　**3** U組織的労働；勤労　**4** U（（正式））勤勉 [hard work], 努力　[effort]《◆形容詞は industrious》; admire industry　勤勉を称賛する

筆者の本棚にある他の英和辞典にも、ほぼ同じことが書かれている。つまり、industry

には主としてとしてふたつの意味があり、それぞれの意味で使う形容詞は何か…が要点である。もっと言ってしまえば、industry が industry を産んだ、ということであろう。さすがランデス、面白い言い方をする…。

“industrious revolution” prepared the way for the industrial revolution” の前の industrial が「勤勉な」の意味、後の industrial は「産業の」の意味であり、industry という単語の二つの意味を分けて、いわばかけているのである。つまり、ウェーバーの言ったプロテスタントの倫理は日本にもあったとし、それを商人が持っていたとするのである。大塚史学と通称される日本の比較経済史学では、そこでいう中産的生産者がこの勤勉のエートスを身につけて、イギリスの 18 世紀後半の産業革命を起こした。同じことが日本では江戸時代後期に準備され、新しい産業がヨーロッパから移入されたときには、商人の勤勉のエートスが日本の産業革命を引き起こした。つまり、industry には主としてとしてふたつの意味があり、それぞれの意味で使う形容詞は何か…が要点である。もっと言ってしまえば、industry が industry を産んだ、ということであろう。士農工商のうちの一番下の階層がこれを成し遂げた…。人の「勤勉革命」が経済の「産業革命」を用意した…ということができよう。

さらにランデスはこの点を次のように強調する。西ヨーロッパでそうであったように、日本でも、支配者にとっては、mercantile prosperity（商業の繁栄）は増収を意味した、そして、収入は快楽と権力に転換できることを学んでいたのである、と。ここでは、多国籍モデルが当てはまる。日本は事実上、250 の藩（原文では、Japan was in effect a competitive economic world of over two hundred fifty nations ((p.363)) とある。当時は 250 余の藩があったことを考えると、この nations とは日本の当時の藩を指していたと考えられる）の競争世界の中で、盛んに競争をした世界だったのだ。そのすべてがより多くを欲したが、多くの藩はそれを得られなかった。

おもしろいことにランデスはさらに、お金がないほど、気持ちを集中できることはない、と続け、米の年貢以上の収入を産もうとする時、大名たちは、道路、運河、開拓、灌漑、新種の作物、種の改良などで改善を図るようになっていった。あるいは、売買できる物に特化しようとした。

ここまで来ると、筆者は再び、比較経済史と対照させてみたくなる。比較経済史では、勤勉のエートスをもった中産的生産者層は、ギルドの支配する都市を出て、the country（田舎）に行き、そこで、自分たちの勤勉のエートスを自由に発揮できる仕事をし、一般市民の欲する物を合理的な生産方法で作り、初めは、その田舎にできた小さな市場（これを局地的市場圏と呼んだ）に出して、わずかだが確実な利益を得ていき、徐々に進む技術改革を取り入れていき、やがてこれが産業革命という大輪の花を咲かせると言う。ランデスはここに大名＝支配者たちの思惑をもってきて、彼らがいわば自分たちの藩の経済の基盤（現在の用語では、インフラとできよう）に投資を行い、さらに生産を伸ばしたとする。比較経済史では、時の支配者たちの思惑に合う生産向上は、early industrial revolution であったとし、支配者のためになる分野しかこれを行わなかったとして、軍事面などの生産向上だけに力を入れたとする。中産的生産者層が行った技術の向上・生産向上は、いわば庶民の必要とする物をより合理的に提供したとしたのだから、ここにも大きな違いがある。

また、比較経済史では、お金をもつことを強調するようになる前に、＜価値の転換＞というものが起きたとする。この転換はおよそ次のようにして起きた――もし禁欲の精神を発揮して、通常の市民のために働いたことが宗教的な意味をもって、それだけ良いことをしたのだから、天国に行ける可能性が増えるとされるならば、この精神を多く発揮したことが徳を積んだことになる。ならば、逆に、お金を儲ければ、それはこの徳を積んだからだ…ということになるであろう。ならば、お金は儲ければ儲けるほど、禁欲の精神を多く発揮した、よって天国に近づくということになるではないか、という論理であった。

そして、この価値の転換が起きると、勤勉のエートスが逆転して、昔ながらの単なる金儲け精神に戻ってしまったのだから、たとえば、ウォール街の強欲主義とか、日本の談合の蔓延になった。

ランデスの論に戻ろう。上からのインフラ投資と個々の百姓の進取の気性が合体して、農業は伸びる。耕作地は 1598 年から 1716-36 年の間におよそ倍になり、農産物の生産は 65 パーセントほど伸びた。もうひとつの推計では、農業における土地と労働の生産性は 1600 年から 1967 年までの間に、30 ～ 50 パーセントも伸びたともされる。これはもちろ

ん米を中心にした計算であるが、もうひとつ重要なのは、養蚕業、米以外の穀物、新種の作物としての砂糖・さつまいもなどの産物であった。都市化が進んで、これら特殊な作物への需要が増え、街の近くの村では、物々交換や園芸が進んだ。これは、16-17 世紀のロンドン周辺での展開とまったく同じであると論じ進む。藩のなかには、藩自体が自分のものだと言わない場合には、金属を掘ったところもある。はじめは銅を掘り、やがて石炭を掘るようになった。

こうした発展のアキレス腱になったのは、藩自体がこれを独占しようとして、自分たちが得するようになることをねらって、価格をゆがめたことであった。通常は、他の藩が競争をしかけて、市場の秩序が戻る。ヨーロッパでは政治・習慣・輸送のコスト高などから市場は細分化されていた。これと違って、日本はコンパクトで商業は統一されていたから、保護の価値を低下させがちであった。しかし、時として、薩摩の砂糖のように、気候が藩を守り、他藩からの競争から守ったこともがあった。江戸時代の終わりの時期でも、53 藩の独占というのはまだ存在した。こうした独占は、もちろん、それに参加した藩・商人・生産者（農民とマニュファクチャ）に有利であった。消費者が割りをくらって、償うことになった。

ひとつの重要なる innovation= 革新は、綿の cottage industry= 家内工業の台頭であった。ヨーロッパと同じように、日本でも綿の登場は遅かった。16 世紀から 17 世紀の初めになって、ようやく使用が広がった。しかしこの後は、急速に麻を追い出し、価格の安さや利便性、快適さなどから綿の市場は広まった。日本での綿製品の製造は、いくつかの形をとった。町ではギルドによる生産があった。農村での店を、独立した小親方（子作農がモノづくりに転じた場合など）が経営した場合、この独立した親方が農村で独立した店を経営し、内外から紡ぎ手・織り手を雇う場合、農村でプッティングアウトする（問屋が外に出す）場合などである。長期的に見ると、これはイングランドでも同じであったが、街の manufacture は農村に負けることになった。田舎のほうが賃金が安かったし、ギルドの統制は物事を窮屈にした。農村がいくつか固まって、集団的な綿の *fabriques*（製作所）になった場合も多かった。農業は空いた時間に行われるか、単純に投げ出された（これは、その地方の支配者を困らせた）。

工場ができる前の早発の展開（proto-industry と呼ばれることもある）は 19 世紀半ば

になると利益をもたらした。このころになると、開国となり、海外からの物が入ってきて、西洋で機械で作られたものが広がった。これで糸紡ぎ（spinning）部門は崩壊してしまったが、輸入した紬ぎ糸を使った織りの作業は海外からの布に対抗できた。その後は、イギリスと同様、綿織り物は日本の産業革命の指導的な部門となっていった。事前にできていた機械工場と熟練工たちのネットワークを活用したものである。

ランデス自身がなんども強調しているように、日本の産業革命は江戸時代後期に、イギリスの産業革命と同じパターンをとって進んだと言うのである。

地域的な専門化も、またしてもイングランドと同様に、統一された市場に頼るところがあった。線から考えても、町の相互の関連から考えても、統一市場と言えるものが必要だったのだ。企業の代理人たちが、労働力と商品を求めて急いで探し回った。ここで我々は、参勤交代の意図しなかった効果を見ることになるとする。つまり、数百の大名・その家族と家来たちが、地方の藩から江戸を行き来したのである。これで、奇妙な場所も見たし、宿の発展もあった。流動資金、これに対する需要・送金の設備は巨大なものがあったし、手工業や店、そしてサービスはどんどん増えていった。

16 世紀には漁村であった江戸は、18 世紀には世界最大の都市となった。全国の人口はおそらく 2 千 600 万ほどであったろうが、そのうちの百万人がここにいたのである。ロンドンのように、江戸はこの国の心肺となった。経済の血を各部に送り込み、人を引き付け、外に送り出した。これで、分業を進め、需要・知識・技術の普及を促した。江戸は最大の市場であり、侍たちは顕示的消費で競争し、技術者や小売店主たちを豊かにした。こうなるとまさに、店を持つ者の天国で、世界最初の department store（百貨店）がここでできたのだと自慢することになった。ただ、こう言ったからと言って、古くからある商売の中心地を見逃してよいというものではない。江戸と並んで、大阪・京都の対があったし、ここには天皇とその宮廷があり、さらに、工業・銀行業・通商の中枢があった。

このふたつの中心地と地方経済のネットワークは、購入の新しい技術（先物の売買を含んだ）・分配（商品別の船が沿岸海運についていた）・支払い（為替手形、譲渡可能な倉庫証券、手形の交換）などを可能にした。これは、ヨーロッパの中世・近世の商業革命と同じことをしていた。ただ、それを上回ったし、その速度はずっと速かった。この島々の間

の経済は、アダム・スミスの述べた特化・分業・需要の成長に沿って、急速な変化を遂げていたのである。しかし、ヨーロッパより真の長所ももっていた。(1) 250 年間も戦争というものがなかったこと、(2) 水運がヨーロッパより廉価で普及していたこと、(3) 単一の言語と文化をもち、(4) 古い通商禁止条例などがなく、新しい規則を導入することは禁止されていたこと、(5) 共通の商人間の倫理ができてきたことなどである。

分業と特化で、田舎と町の間により緊密な関係ができていった。ヨーロッパではイングランドのみに見られた、田舎の早発的な都市化である（他にはオランダで、イングランドほどではなかったが同じ現象が見られた）。遠く離れた田舎も、行商人が行き来して、現金売りも、掛け売りでもした。たとえば、いわゆる富山の薬売りたちは、一定の商品を農民に残していき、後になって、使われた分だけのお金を受け取っていった。これは、日本人が整然としていたということ、もっと重要なこととして、正直なことを示して余りある。より人口稠密な地方では、固定した小売店ができた。そこで売られている商品のヴァラエティには驚くべきものがある。なかには産業化以前の特売品があり、金物類のほか、かつては農民が自分で作った衣服もあった。まだ読み書きのできる者を見つけるのがそれほどやさしくないところでも、筆記用具や紙があった。当時は、このような店は、大陸ヨーロッパではなかなか見つからなかった――唯一の例外は、スイスで時計を作っていた地方であろう。ランデスはこのようにくわしく江戸時代の日本経済の発展度を示す。

さらに一歩進めて、このように江戸時代を詳述していく。――忙しく動いていて変化している社会というのは、知的な面の発展をも檻に入れてしまうわけにはいかない。たしかに厳しい制限や禁止条項もあったヨーロッパの知識は染み込んでいった。そのほとんどが、出島においてオランダ人と接触があったことから起きた。18 世紀半ばまでには、こうした外国の知識を *rangaku*（蘭学）と呼んでいた。ランデスはここで、Holland とつづられるオランダのことを日本語では［l］の音がないため、［r］を使って *rangaku* とすると言う。それまでは外国からの知識を *bangaku*（蛮学）と呼んでいたので、これ自体、新しい態度だとする。

ただし、日本語でラリルレロと発音するときは、実は la-li-lu-le-lo と発音している。筆者は長い間、英語を使っていて、英語の［r］と［l］は混同しなくなった。自慢するわけではないが、オーストラリア人の日本研究者（日本研究が専門なので、日本には頻繁に

来るし、そこで多くの日本人と英語で話す経験を持っている）に、「近藤さん、あなたは日本人ではない」と言われたことがある。筆者は、「それはどういう意味ですか？　わたくしは120パーセント、日本人ですよ」と言ってしまったが、その意味は、筆者が［r］と1［l］を混同しないということであった。たしかに日本語をローマ字で書くときには［l］は使わないが、現実に英語を話す時には、たとえば、lie ということばを発音するときには舌の先を上の口蓋につけて＜ライ＞と発音すると、lie になる。こうしたことについて、詳しくは、拙著『通訳者のしごと』（岩波ジュニア新書）の70–73ページ、あるいは同じく拙著『通訳とはなにか』（生活書院）の96–98ページを見ていただきたい。日本で英語を教えている英語母語話者は、「日本人にはこのふたつの子音の区別はできないんだ」と思うようになってしまっている。ランデス氏まで、易しい区別の仕方を混同しているのを見るのは、残念ではある。

再びランデスの言っていることに戻ろう。日本人が蘭学を通してヨーロッパの知識を吸収していったとしたあとについて、彼は次のように続ける。このようなことに目覚めたことのひとつの結果は、英語で helpful と harmful を混乱しなくなった、同じように、acceptable と unacceptable を区別できるようになったことである、としている。キリスト教と関連書籍はまだ「望ましくないもの」、「タブー」と見られていたが、中には、西洋の俗世界の知識から日本が学んで得することがあるものはたくさんあることに気のついた者が出てきたとする。

こうして、1720年（享保5年）になって初めての突破口が開かれた。幕府が、キリスト教についてのものでない書籍は輸入できるとしたのである。この後、この規則はゆるくなったり厳しくなったりしたのだが、とにかく数人の日本人が新しい学問を学び、それを出版することができるようになった。このことは、新しい学問と古くからある儒教の教えとの間に衝突をもたらした。これこそまさに正統信仰への挑戦が行われる道であった。はじめは、*Rangakusha*（蘭学者）たちはあえて挑発はしないように、控えめに自分たちの貢献を表に出していたので、大槻玄沢（*Ladder to Dutch Studies*、1783の著者）はこのように言っている――「蘭学は完璧なものではないが、もしわれわれがその良い点を選んでそれに従うとしたら、いったいどんな害があろうか？　この良い点を論じることを拒絶し、

知っていることにこだわり、変える希望などもたずして、知っていることにしがみつくことに、どんないいところがあるのか？」と。

このような優しいことばも、儒教家の怒りをそらすことはできなかった。この新しい学問は、それまで日本文化の前提だったことに挑戦したのである。もちろんこの儒教の教えは中国から来たものである（中国人は、barbarian= 野蛮人と呼ばれなかった唯一の外国人であった）。

多くは、いわば政治の事故によって決まった。たとえば、18 世紀の終わりのころ、幕府は「儒教哲学だけを教える」と決めた。しかも、儒教のある一説だけを、である。これに続く数十年間、洋学規制はますます厳しくなり、あからさまな弾圧となっていった。1830 年代に江戸の知事として任命されたある中国学者は、蘭学者たちを追いかけ、執拗に首狩りをしたようなものであった。最後には、投獄して強制的に自害を迫ったものである。しばらくの間、日本は best and brightest（超一流の人材）を食い尽くしていたのである。

しかも、蘭学の多くが、伝統的な知識を否認し、昔からの信仰者を辱めた。日本文化における辱めはとても耐えられないものである。たとえば、ヨーロッパの医学は解剖によってはじめて立証されたとされ（「論より証拠」なのであった）、中国の教えを笑いものにした。同じ理由によって、東アジアが孤立して自己満足していた世界では、地理上の現実は本質的に破壊的なのであった。再び大槻の言うところを聞いてみよう――「狭量な儒教家やありふれた医者たちは世界の巨大さについて、何も分かっていない。あるいは華麗な真ん中の国とする。これは間違った考え方である。世界は巨大で偉大な天体なのだ…。」と大槻は言う。中国人には不幸なことに、彼らは自分たちが世界の中心であるとして、このナンセンスに固執していた。これに対して日本人は、新しい真理に向き合ったのである。「太陽と月は、すべての場所を同じように照らすのだ」と。

ここで一つ、注意しなくてはならないことがあるとランデスは続ける。日本人がヨーロッパの科学技術を学ぶようになったということは、追いつきそうなところまで来た――ということでは全くない。彼らは、いくつかの場所で、ヨーロッパの知識と接触したが、これらの場所はバラバラであって、それは日本のフロンティアから遠いところにあった。こうした状況下では、たしかに徳川時代の商業的・産業的な発展は特別なものであって、

日本がヨーロッパの科学的・産業的革命の教訓・学習を受ける準備をしたとは言え、それでも、こうした前進を自分で想像して、突き進むには、とても遠いところにいたのである。

どのくらい遠いところにいたのかは、言えない。なぜならば、ヨーロッパ人は日本に来て、孤立を破り、機会と歴史の先取りをしたからである。最近の歴史研究では、世界史のヨーロッパ中心主義を拒絶する。非西洋民族の自主性と先駆けて事を行う才能を強調し、帝国主義的挑戦への反応に古い焦点を当てることに不賛成を唱える。日本に関する限り、私ランデスはこのような考察に賛成する。というのも、ヨーロッパの産業革命がなかったとしても――以下を証明する道はないことになるが――、遅かれ早かれ、日本人は自分たち独自の産業革命をやり遂げたであろうと確信しているからである。

ランデスは以上のように、Ch 22, 'Japan：And the Last Shall be First' を閉じる。日本は最後に豊かさへの道を行くのだが、先頭走者になる…と言うのだ。その証明として、西洋の中世と徳川時代の類似点を挙げ、日本にウェーバーの唱えた勤勉の精神まであったとする。

日本が実際にどのような道をとって、豊かさへの先頭を走ることになるかを示すのが、次の章、明治維新を扱う章、Ch. 23 'The Meiji Restoration', pp. 371-391 である。竹中訳では、「第 14 章　もっと評価されてより『明治維新』」、(308-328 ページ) となっている。ただし、本稿では、いったんここまでを一区切りする。次の章はかなり長いし、ここまででもすで 20,000 字を越えている。以下は、他日を期したい。

ただし、ランデスは次章の最初の行で明治維新を revolution とする（'Japan had a revolution in 1867-68…'）。 通常使われる the Meiji Restoration という英語の表現は、もちろん to restore（「もとに戻す、返還する、復興・復活する…」という動詞から派生した名詞である。よって、徳川時代という武士による政権の時代が終わって、それが天皇親政に戻ることを意味する（筆者はかつて、the Meiji Reformation= 改革、改善、矯正、改良…と訳したことがあるが、今日ではいくつかの辞書を見てもそのすべてが Restoration となっている)。ランデスがこれを初めから revolution ＝革命としていることは、大きな意味をもつ。これに続いて、「将軍職は打倒され――これは本当に崩壊したのだ really it collapsed」と念には念を入れている。「国の支配は、京都にいる天皇に戻された。千年

の４分の１にわたった徳川の支配は終わった」と。ただ、次のような解説をつけ加える――「しかし、日本人はこの復興を＜革命＞とは呼ばない。これで＜正常に復した＞と捉えたがる」と。そして、「革命というのは中国についても言える。ここでは複数の王朝（dynasties）があったが、日本には単一の皇室があっただけなので、これは、元に戻ったという意味しかなかった」と。

「維新」の語をどう訳すかに、これだけの意味を持たせる。しかも、竹中訳ではこの章が「もっと評価されてよい＜明治維新＞」とされている。明治維新が何であったかについては、日本史家の間で、講座派と労農派との長い論争がある。ランデス（と竹中氏）は、ここだけ見ると労農派に近いように見える。はたしてそうなのであろうか。

こうした興味ある問題にランデスがどのように立ち向かうかも、とっても興味のある論点である。